フィールドで考える

工人たちとの対話
——アルメニア建築を読み解く

藤田康仁（東京工業大学助教）

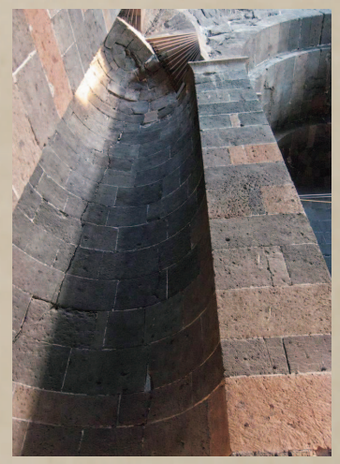
アルメニア建築とは

アルメニア建築とは、四世紀初め、世界で最初にキリスト教を国教としたともいわれるアルメニア民族が、今日まで連綿と建て続けてきた教会建築をいう。黒海とカスピ海のあいだに位置するアルメニアの地政学的条件とその歴史を踏まえると、この建築群は、単にキリスト教建築の歴史だけでなく、ローマ帝国やササン朝ペルシア、ビザンツ帝国にウマイヤ朝、セルジューク朝といった、絶え間なく迫り来る強国の狭間で、東西の建築文化が如何に混淆したのかという、より大きな歴史と文化の流れを考えるうえでも、重要で興味深い研究対象といえる。アルメニア建築の調査を続けて一五年。アルメニア共和国の他、トルコ共和国に残るものも含め、二〇〇を超える遺構を踏査してきた。

歴史建築調査の手法

調査は、できるだけ多くの遺構を、できるだけ詳細に調べることを旨とする。遺構の全体像と細部を具に記録する写真撮影、建築の空間の様子を収めるビデオ撮影、形や大きさを把握するための平面実測や写真測量の他、建物や地盤の構造を解析するための微動観測や、建築材料の特性を知るための材料の採取も適宜実施し、建築史の研究者だけでなく、各分野の専門家と共同して研究を進めている。

これまで欧州を中心におこなわれてきたアルメニア建築に関する研究を振り返ると、建築の平面や立面の二次元的形状、彫刻等の装飾の分析から、その特徴が捉えられてきた。しかし、建築とは本来、具体的な建築材料を組み立てることで成り立つ、立体的な構築物である。我々の調査研究の背景にある、実体としての建築物の性質を如何に捉えるかという発想と手法は、欧米とは異なり、建築学や建築史学が工学の分野に属する日本の研究システムに依拠しているともいえる。こうした調査研究でえられた成果は、一方で、遺構の保存修復へ活用できる利点も備えている。


水平に連続する切石の目地

研究の「嗅覚」

実際の調査は、いわば単調なルーティンワークである。遺構に到着すると、各調査員がそれぞれの役割を黙々とこなしていく。ただ、その作業に専念するだけでは、調査報告はまとめられても、なかなか研究には結びつかない。常にどこかで、研究への「嗅覚」を働かせている必要がある。

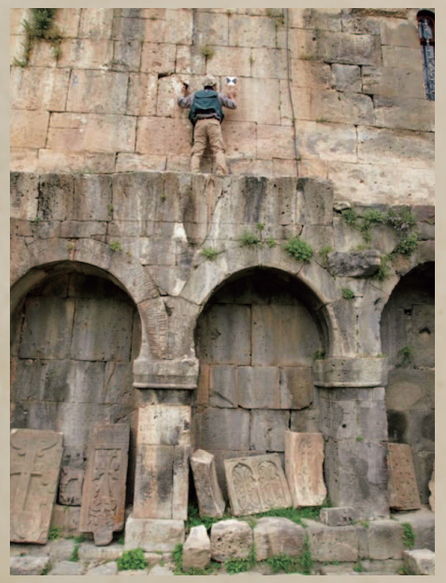
例えば、その匂いは、あるとき建築の壁面から不意に漂ってきた。アルメニア建築は、壁面内部のモルタルと粗石を、壁面の表層を構成する切石がサンドイッチのように挟みこむ、ラブル・コア工法を採用している。みれば、表面の切石の目地が水平に揃っている。それは、当然だが、当時の職人がその高さを決めて切石を製材し、積み上げたことによる。彼らがどのような物差しを使って建物を建てていたかは明らかにされていないが、この切石の高さには、それを逆算できる可能性が秘められている。

さらに、この切石の水平目地は、必ずしも常に連続しておらず、しばしばずれも認められる。このずれの生じる箇所は、壁面と壁面が接合する建物の隅の部分や、壁面上に柱が埋め込まれている部分に多い。おそらく、壁面を施工する際の工事箇所に区分があり、その区分ごとに切石の高さを決めた結果、こうしたずれが生じたのであろう。時代がくだるにつれてこのずれが解消され、水平目地が建築全体で揃うようになるが、この傾向からは、建築技術の水準が上がって建築全体を計画するようになったのと同時に、ドーム（半球形の天井）という難易度の高い構造物の導入に伴い、より精度の高い水平な「土台」を建築の下部で実現する意図を読み取ることもできる。

こうした建築の作り方は、これまでのように建築の平面形状ばかり眺めていても見えてはこない。筆者の経験からいえば、目地のずれのような、遺構のなかで時折見受けられる小さなほころびや齟齬に、建築を理解するヒントが多く隠されている。当時の建築技術や工人の工夫と苦労が偲ばれるこうしたほころびを見つけるのは容易ではないが、一五年を超えてなお飽くことなく調査を続けているのは、現地調査に「嗅覚」を研ぎ澄ませながら、遺構に残された、かの工人たちの手仕事と思考の痕跡に触れることに、彼らと「対話」する面白さを見出したからなのかもしれない。

リプシメ教会堂（7世紀創建）

建築物の微かな揺れ（微動）を測って、構造的な特性を把握する


建築物の大きさと形を測る写真測量の作業